

里見賞設立によせて

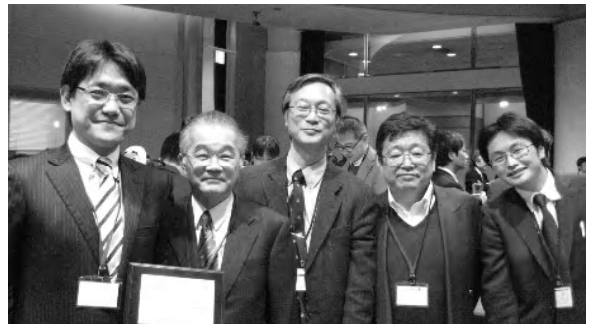
このたび、学会として私の名前を冠した賞を作ってください、この上なく光栄に思っています。里見賞をスタートするに当たり、私のこの賞にかける思いを述べさせていただきたいと思えます。

世の中は、ある領域においては既に「予防医学 prophylactic medicine」の時代に足を踏み入れています。私は胎児心臓病の領域ではこれからの 10 年間 「前方視的医療、さきどり医療、prospective medicine」ということばが、Key Word になると思っています。出生の前に患児の心疾患を診断して、もしそのまま経過をみていけば出生後に発症してショックを起こしたり、全身の臓器に生命に関わる重大な障害を残すはずであるのを、事前に血行動態を予測し、両親に説明し、発症する前から医療計画を立てて、その計画に沿って医療を進めるという医療のことです。このことにより心疾患を有する患児の、手術成績を含めた生命予後は向上するのはもちろん、術後の生活の質 QOL も格段に向上し、ICU 滞在期間は短縮され、かかる医療費も、これを行わなかった場合よりも削減されることが明らかになっています。

これを実現するためには、ひとりの医療従事者の献身的な働きだけでは到底達成できるものではありません。その病院の先天性心疾患患児の「Prospective Medicine」に対する強いおもしろい、医療チーム全体の総合力がひとつになって初めて実現する医療なのです。わたしはその意味で、里見賞は一個人に対して授与するものではなく、医療チームに対して授与することを考えました。つまり、この賞は個人が自宅に保管するようなものではなく、丁度学校の運動部が優勝カップを、優勝した誇りとともに部室に、あるいは校長室に未永く保管するように、自分の病院へもって帰り、病院全体の誇りとして、保存して語り継いでいくような賞にしたいのです。

そこで、里見賞として「楯」を贈ることにいたしました。それもこだわりにこだわって、それを見た人が「自分もとりたい」と思えるような、立派な特製楯を作成しました。若手臨床家や研究者を応援し啓発することも学会の重要な役割であることから、応募された研究発表の中から優れたもの 1 点を選び発表者個人に授与するものも同時に作りました。つまり、里見賞は、医療チームに送られる賞を団体賞にたとえるとすれば、個人に贈られる個人賞のふたつの賞が誕生したことになります。

学会員の皆様、里見賞の設立の意味を理解していただき、日常診療、あるいは臨床研究において、次回の里見賞をめざして益々励んでいただくことを希望しています。



2010年2月 さとみクリニック

里見元義